

寒風 早村 春鶴

溪流の音をまたぎて紙漉場
寒風に身を縮めつゝ、バスを待つ
目覚めれば溪の奥から虎落笛
流れ変へ護岸工事の冬の川
木枯に向ひいて寡黙にバス停へ

初御空 一谷 春窓

平成の終わりの朝や初御空
獅子頭置いて一服茶わん酒
隣家とて普段着つねぎのまゝの御慶ぎよけいかな
膝折りて見舞ふ陛下こごや去年今年
末の子の読み手上達かるた会

初冬 山本 春英

先人の個展ににぎわう小春日に
この頃は心の痛む冬の夜
日向ぼこする老人ひとのなき昼下がりに
日向ぼこ自分の影を従へて
弁当を造りし初冬今日も無事

編み物の先生を偲ぶ 山岡 扶佐

じつと見る師の指先や毛糸編む
迷いなく動く手見た日小六月
凧や母を送る娘独りぼち
息白し流生深す大都会
底冷えやビルの谷間に星流る

虎落笛もがりふえ 山内 松琴

木枯の中小走りの宅配便
おしゃべりを止めて窓辺の虎落笛
街路樹の黄葉ぬけて茶器銘展
茶器展のもてなし庭の焚火かな
久びさに娘と歩む落葉音

師走 北畑 芳草

上着手に街行く人の師走今
木枯のなきまま暮るゝ穏やかに
日めくりをめくる暇なく師走来る
南天の実を嘴くちばしにすずめ二羽
弟の病変わらぬまゝ、師走

冬初め 貝賀賀代子

ワクチンを打ちて安堵の冬立つ日
七五三スマホ片手に写真館
石路咲いて明るき庭の昼下がり
背を丸め猫らと共に日向ぼこ
俳都なる伊予路に遊ぶ波郷の忌

冬の星 森本 智子

黄銀杏美術画展の白き裸婦
やうやくに立ちて見回す冬蟪蛄かまきり
天空の駅小春日にひとり待つ
東ひんがしに冬のオリオン横たわる
鳥群れて頭翼に日向ぼこ



御慶 早村 春鶴

道端の御慶声高土地訛
神を呼ぶ宮司の声す初鳥
宮司等に遅れて柏手初詣
榎原の宮の御降絵馬ぬらす
初旅の土産は吉野葛の菓子

御神渡 一谷 春窓

息白し走者に拍手追いかけて
御神渡し宮司は日の出待てぬらし
地下足袋に踏まれし水仙測量士
寒さでは負けぬと木曾の同級生
冬晴れの湖にひびきし鶯の聲

白障子 山本 春英

冬木の芽そつと未来をのぞき見て
公園の子等は木枯友として
つくることなきお弁当冬休み
木枯に押され老人歩を速め
亡き嫁の張りし障子のもう破れ

新年 山岡 扶佐

年酒酌む寿ぐ客は美味と言ひ
年始客美酒酌み一人赤ら顔
七種を指折り数へひとつ欠く
風花のありしは昼のことといふ
健脚を守り母生き去年今年

新年 北畑 芳草

家族皆集ひし今朝は年酒酌む
息災を七種粥に願ひたる
あたたためて七種粥を二杯たべ
元朝の掛軸自作干支の文字
初春の山深き溪煙たつ

冬夕焼 貝賀賀代子

冬夕焼ビルの窓染め雲流る
ハイキング今年最後に時雨らる、
どの家もポインセチアでクリスチャン
木枯や戸を打つ音に耳すます
平成の年越最後部屋掃除

寒椿 稲代 英明

初詣和服の小娘神妙に
満開になりてぼとりと寒椿
正月の群衆攻め入る大阪城

年の瀬 森本 智子

巡礼の鈴遠のきて年の暮
もぐる鴨まどろむ鴨の群ごとに
木枯に散り尽したり大銀杏
放棄田の祠のあたり枯芒
農夫婦出荷急かさる師走かな

雪だるま (中一) 岡里 莉那

雪だるま次の日快晴子ども泣く
町の木々みなキラキラとクリスマス
時は過ぎテスト始まりもう師走
木枯に散歩をせがむ子犬たち



年の豆 早村 春鶴

数へては見たけど足りぬ年の豆

園児らの投げしをふみぬ年の豆

真新たらし針のさされし針供養

錆びたるも新しきもある針供養

外国の言葉あふる、京の春

梅香る 一谷 春窓

受験の子天神様に絵馬結ぶ

白梅や湯島天神護符受ける

御点前の慣れぬ作法や花の下

鳥城桜の下の野点かな

紙梳きて小窓開ければ梅香る

連翹 東 素子

連翹の参道に生く手古奈廟

店先の連翹一鉢華やいで

あつあつの大根ありて酒すすむ

爛酒を亡夫の盃と酌みかわす

夫と友爛酒の味置いて逝く

寒雀 山本 春英

初場所の荒れしも我が家なごやかに

寒雀よちよち拾ふ落とし餌に

今日のこと反省ばかり月冴ゆる

にぎわいの書展の外は春時雨

七種の粥を嫌ひし若人らは

雪の上野山 山岡 扶佐

凍返る上野に多き異国人

白帽を被る紅梅五・六輪

凍返る野外催し素通りす

春來たるらし館内の学書熱

春浅し書展の熱気館に満つ

氷雨 山内 松琴

桜の花ほころびはじめ香り聴く

雨音や氷雨となりて町覆う

針山の埋もれし針の針供養

ごまあえの春菊香る夫好み

春めきて家具を動かす元氣あり

節分 北畑 芳草

ざわめきの中声高に節分会

齢よりも豆は少なめ節分会

鳥来て鯛をねらふ節分会

赤き糸つけたるまゝの針供養

役割をつとめ終へたる針供養

初雀 貝賀賀代子

年賀状運ぶバイクの音待ちぬ

早朝のペランダに遊ぶ初雀

御降りや心おきなく一人酒

スーパ一の七種なれど粥温し

京みその香で祝ふ雑煮膳

紅梅 稲代 英明

芹すずなお椀の中の朝の粥

年の豆孫に合わせてみぎひだり

紅梅や始むほころびここかしこ

雪降る日大腸検査延期とす

初曆 森本 智子

一年の計動き出す初曆

裸木の隆々として天を突く

蠟梅の花多かれどうら寂し

駅伝の選手追いしか春時雨

七種を唱へつ菜をうちにけり

春時雨 (中一) 岡里 莉那

夢覚めて窓を開けると春時雨

絵馬見ればもうこの時期か受験生

トントんと今朝はお粥だ七種だ

寒中見舞 東 素子

新春の森羅万象変わりなき

北風に首すくめいし余生かな

あるじなき大き空席冬座敷

夫逝きて寒中見舞増えおりし

七種の粥は習いの行事とし (先月未掲載分)

七種粥 山内 松琴

初旅のカタログ届く旅支度

七種の名前数えて歌となる

万葉の世界七種粥に混ぜ

御無沙汰の賀状に込めし猪の文字

初そうじ心もこめて客迎へ (先月未掲載分)

東風 早村 春鶴

バス中に桃の節句の飾り物
配膳に桃の一枝箸置きに
朝東風の雨戸ゆるがす強き音
ものの芽の出る気配して踏みまじく
一本の土筆にきりて園バスへ

桜漬 一谷 春窓

こち良き繁吹を浴びて猫柳
友の来てまず立ち話チューリップ
ブラインドの隙間もれくる春の月
子供等の指差す先に黄蝶舞ふ
友来たり白湯に浮かべる桜漬

白梅 東 素子

白梅のほのかに香る雨静か
好もしき白梅の香も枝振りも
白梅の二輪咲きしと友の文
突き上げし大地震を知る春八年
地震の日や夫と歩きし矜立てて

山笑う 山本 春英

幼児の育つ早やさや山笑ふ
春時雨信号待ちのぬれもよし
頭なきマチ針さして針供養
校庭の紅白梅や子らの声
また一つ悩みごと増え三月来る

桃の節句 山岡 扶佐

雛の顔さわるなかれと父のいふ
白き顔綿でくるみて雛納め
手間かけぬ献立なれど雛祭
俄かとして目覚しとなる春の雷
春夜半寄せの付箋父のもの

桃の節句 北畑 芳草

お供に母の好物ひなあられ
人行かぬ奥まで続く桃の道
ひな人形黒髪光る仏間かな
雨やみて歌声はずむひなまつり
盆梅の座敷にありて香のこもる

万作 稲代 英明

ほめられもせずに万作秘めて咲く
桃の花ひと枝瓶に男子会
春霖の中へ散髪隣の町

雪解 貝賀賀代子

薄氷のきらめき淡く解け初むる
春の海行けど行けども沖遙か
慰霊碑に束ねし五本黄水仙
雪解水集めて早瀬にこりたる
針供養針持たぬ日の久しけれ

春光 森本 智子

針もたぬ日のなき母の針供養
大川の春の漁とて竿並ぶ
大地からそつと傾げてふきのたう
春光を浴びて七色鳩七羽
解体に土蔵の消へて春浅し

玄遠俳句

和年
令元 5月号

花吹雪 早村 春鶴

古今集伝へし碑文花吹雪
通過駅桜満開徐行して
帰路のバス人皆寡黙花疲れ
地をかすめ飛べる燕つばきやがて雨
一輪目咲きしと便り牡丹園

鈴懸 一谷 春窓

縋すがるもの無き炬塞ろうふさぎの夜をむかふ
花薫る草にじゃれつく猫二匹
元号のかはりし賛へ五月富士
鈴懸の花影ふみて下校の子
種袋水を欲しがる音のして

春眠 東 素子

手捻の一碗茶に春を聴く
登り窯さかを供え春迎へ
友の窯三昼夜焚き春集ふ
魅入らるる美し焰の登り窯
春眠や御神酒とジャズに酔わされて

春休み 山本 春英

初雷は灯りの向うひとりゆく
五十音書きつつ春を待つ子かな
旧友の次々逝きて散る桜
芋植えのお手伝いの子ふる里へ
うた声の家中響く春休み

桜 北畑 芳草

堀越えし枝ぶりみごと庭桜
人住まぬ被災地なれど花の園
老人の背に桜舞ひ舞ひ落ちる
にぎりめしほおぼる顔に春の風
手習ひの孫につきそふ道桜

水温む 貝賀賀代子

佇みて香探さむ沈丁花
境内の賑はふひと日春彼岸
我が摘みし蓬の餅の青きこと
復興の道遠けれど水温む
老いてなほ紙雛飾り笑顔出て

新若布 森本 智子

朝刈りの鳴門の潮や新若布
白蓮のあえなく散りぬ春の雷
牡丹の芽凜然として萌え立ちぬ
緋桜の咲き築かれり古都は奈良
母からの雛ひなにはしゃぐ孫娘

ひなまつり(中二) 岡里 莉那

片付けの遅れ後悔ひなまつり
見てほしき着物姿を雛よりも
胸に花つけて涙す卒業式



薄 暑 早村 春鶴

野良仕事はかどらぬま、五月雨る、
雨の来て植え時今と苗売り女
昼餉時先輩先達新社員
祝ったことなきま、母の日を過す
陽を浴びて街行く人の皆薄暑

風薫る 一谷 春窓

ラケットの素振りの子等や風薫る
剪定や鶏の諍^{いさか}ふ草の上
梅雨晴れて書肆^{しょし}に令和の万葉集
葉のそよぎ瀬音豊かに夏来たる
吾を抱く母の写真や柿の花

(書肆=書店・本屋のこと)

花の宿 山本 春英

犬友の笑みに会釈や桜樹下
満開の桜に透ける奈良三山
朝散歩古池おおう花の宿
風光る青信号に急発進
母の服着る十七才や春の色

五月 北畑 芳草

鳥の声のみしてひとり田草取
風止んで竿に纏わる鯉のぼり
童心にもどりにて食べし柏餅
阜園^{ふつおん}令和を迎へ華やいで
京の街紅白さえし花水木

花 貝賀賀代子

稜線に掛かる白妙花の雲
見下ろせば浮かれ人あり山桜
夕闇にしだれ桜の影妖艶
花筏琵琶湖疎水に散りて満つ
渋滞の大和路花の吉野へと

春光 森本 智子

自転車をとび降り少年桜樹愛^めで
早やばやと繕^{つくろ}ふ古巢初つばめ
アーモンドの揺るる花影水ぬるむ
春光を含みせんたくもの軽し
衿足の白きかたまり新社員

入学式 (中二) 岡里 莉那

風そよぎ花の香りに窓全開
一片^{ひとひら}の花びらそつと舞ひ降りて
入学式夢と希望を抱きけり



青嵐 早村 春鶴

緑陰の広さに散りて園児輪に
草刈は顔面手足武装して
裏山のざわめきにわか青嵐
燈籠の陰に花たつ鴨足草鴨足のした
梅雨寒や火の気ほしくて目覚む朝

佛法僧 一谷 春窓

犬待たせ友としばしの夕端居
ハンカチのよき香もしまふ白バッグ
手の甲に試す香水出掛けたし
沙羅の花散り際にある潔さいさよ
野佛の賽銭わずか佛法僧

水無月 東 素子

近道の光まぶしき梅雨晴間
沈めぬし吾が水無月の静もる夜
十葉の極まる白さ八重に咲く
若葉風御朱印帳に双元号
天を指す南天の花孤高なり

夏木影 山本 春英

遠足の輪の声はずむ夏木影
白壁のピンクの薔薇バラや影揺るる
子供の日やさしき義弟ひとの逝きし朝
麦飯や箸のすすまぬ息子たち
おしゃれする娘は待ちかねし更衣

梅雨 北畑 芳草

梅雨の入り今日も晴れ間のなきまゝに
あじさいや工場跡地の散歩道
長ぐつの休む暇なく五月雨さみだるる
そら豆のプクツとふくれ天をさす
えんど豆豊作なれど腰痛め

皐月さつき 貝賀賀代子

目覚めれば令和の御代や風薫る
災禍にて痛めし木々の若葉萌ゆ
倉敷の白壁まぶし皐月空
寄りそひて香に包まれし新樹影
見上げたる泰山木の花真白

でんでん蟲 森本 智子

屋上の薫るさつきや昼休み
三倍に伸びてでで蟲垣根越ゆ
水張りし田のさかさまの町灯り
咲き満ちてたんぽぽの祭じよときを待つ
薫風にのりて少女のサキソフォン

母の日 (中二) 岡里 莉那

耳すます楽しい音楽さつき晴
皐月の名間違えられておちこむ日
母の日の料理引き受けこげ臭い



晩夏 早村 春鶴

降りたてば祇園囃に迎へらる
雅びたる祇園囃の駅京都
休耕田草は我が身を越す晩夏
汗ぬぐふふりして休息村作業
天満橋響くどんどこ舟下る

夕立 一谷 春窓

気短かに来る夕立の去るもまた
掌にうけて渴きし喉へ岩清水
踊りの輪孫のおくれ毛大人びて
野の風に憩ふ孫等と展幕かな
木曾川の碧に触れなん夏燕
展幕＝幕参のこと

螢 東 素子

せせらぎの螢の群れの幻想夜
螢舞ふはかなき時を抱えいし
瞬間の光跡あまた螢生く
暮れなずむ歡喜の子らの掌に螢
二度三度瞬く螢宙に溶け

梅雨晴 山本 春英

溜まりたる洗濯終へし梅雨晴間
夏帽や黒一色の人の群
カラフルな傘の列なす梅雨最中
梅雨晴間車輪の汚れ気になりて
短夜や目覚し時計鳴りひびく

天神祭 北畑 芳草

七夕や走りてさわぐ児等の声
心地よきリズムの田植機械音
暗やみにどんどこ舟の音ひびく
植田みな並びし苗と空の碧
七夕のささにこめたる願ひごと

梅雨 貝賀賀代子

碧空にひらりひらりと竹落葉
人波のとりどりの傘梅雨に入る
七変化夜半の雨になほ藍に
古井戸のまわりに十薬花一つ
斎田の横 一列の田植笠

青葉風 森本 智子

シネマへと逸るペダルや青葉風
下校児の黄傘ぶらぶら梅雨晴間
暮れてなほ羽根を休めぬ親つばめ
田植え終ふ農機は泥のタイヤ痕
体操後鳴り出すカルメン夏あざみ

白靴 児玉 一実

青葉風午後のひととき中之島
初螢探す仲間は水の里
白靴をはけば行き先夫まかせ

朝涼(韓国の旅) 山岡 扶佐

父愛でし街並み歩く旅は夏
朝涼の並木整然仁寺洞
朝涼に目覚めし宿の町巡る
オミジャ茶に松の実三粒飲んで汗
林老師健脚の夏景福宮



蛸ひぐらし

早村 春鶴

艦艇のゆったり面舵灯の涼し
蛸の声遠のきて山暮る、
遠近の声細まりて秋の蟬
カルストの土佐も初秋風の中
師の眠る土佐の潮風秋立ちぬ

敬老日

一谷 春窓

敬老の日を忘れたるボーリング
遮断機をくぐりてふはり秋の蝶
主婦三稲架はぎの向かうの長話
夕立ち去り子等に跨またげぬ水溜り
喝采は泣き伏す子役村芝居

夏の月

山本 春英

やり終へし発表会や夏の月
赤い屋根ふとんの並ぶ梅雨晴間
増水の大淀わたる梅雨の入り
飼犬も共に肥ふとりて秋に入る
永遠とわに止むことなき祈り原爆忌

花火

北畑 芳草

花火見て青春時代蘇る
若者の足取り軽し盆踊り
どこからか聴こえしピアノ夏の夕
板べいにせみのぬけがら二つ三つ
初ぜみのひととき声のはげしくて

夕風

貝賀賀代子

夕立ち去り鳥達憩ふ水たまり
片陰を行けど陰尽き歩み止め
夕風や港の街の賑々し
長居してたたみて帰る日傘かな
淀川を埋めて賑はふ祭舟

墓参り

稲代 英明

商店街商品一新夏が来た
歩き方知らぬ二人の浴衣下駄
せめてもの掃苔とむらついでの除草かな

栗の花

森本 智子

閑せまぎ合ふ天神祭の鉦太鼓
島ひとつ香りでつつむ栗の花
牛蛙縄張り誇示す池の陣
草の株引けば狼狽うろたふ万の蟻
初蝶の一声のみで鳴りひそむ

天神祭

(中二) 岡里 莉那

天神祭夜空に咲ける花一瞬
蝉たちよ網から逃げる七日間
日焼け止め味方につけし女達



長き夜 早村 春鶴

長き夜や病棟にわかになわがしく
野にありてこそその秋草風そよぐ
懸命にS字で逃げる穴まどひ
さまざまな形に秋の雲流る
虫の声びたりと止んで闇深し

秋の蝉 一谷 春窓

夕間暮れ土間に転がる鬼胡桃くわみ
一聲の空耳なるか秋の蝉
聞き耳を立て秋蝉の聲惜しむ
紅葉山木曾の松の目立ちをり
大雨に乱れしダイヤ神の留守

秋 櫻 東 素子

懐しき句帳の文字と秋を詠む
秋風や独歩の迷ひ共にして
青柿と葉との同代の薄れ来て
靈廟にお香捧げし秋疊
コスモスの一叢むらありて風を呼ぶ

今朝の秋 山本 春英

天の川流れ行く先雲の中
唐来のひょうたん南瓜おとなりへ
芭蕉ゆれ大鉢おおふ風ありて
何となく肌すつきりと今朝の秋
船旅の紀州の波間湧く花火

秋 北畑 芳草

母逝きてはや三年目秋立ちぬ
脚どりの軽やかな児ら秋の野に
友人の思い出たどる秋の夜
鱒雲散らかすがごときへりの音
静寂の境内広し寺の秋

残 暑 貝賀賀代子

今日も又日射しの強き残暑かな
朝顔のねじりほどけを見し早朝
轟きて窓震はずや揚げ花火
砂浜に足跡残し夏はゆく
桐一葉天使の舞のごとく落ち

広島忌 森本 智子

秋の風自在に我が家を通り抜け
跳びて逃ぐ鼠花火に終われし児
広島忌止まりし時計七十四年
蜘蛛くもの囿にかかりてなほ鳴く秋の蝉
指の先かかとの隅まで阿波踊り

花 火 (中二) 岡里 莉那

遠花火見れてうれしい耳すます
銀賞や心も冷えし冷房機
中三の夏は笑顔の引退式

天神祭 前川 恵美

波に揺れどんどこ船の火を散らす
異国人浴衣の裾の皆短か
天神祭太鼓は川に轟かん



玄遠俳句

和年 11月号
令元

洪柿 早村 春鶴

大漁旗なきま、帰港いわし雲
洪柿と知ってか野猿目もくれず
応援の声も吸われし秋の空
万葉の香の中書展秋深し
せわしなく来ては去り行く四十雀

木守柿 一谷 春窓

野佛に万遍の陽や小守柿
善光寺鳩いつせいに秋天へ
松茸をひとつ貰ひて土瓶蒸し
冬隣肌に重たき湖の風
秋の雲風なすま、に流れけり

長月 東 素子

長月や師の墨跡をたどる夜
木槿垣なくしたあとに秋の風
紅葉せるジュズサンゴにも風寄りぬ
青柿を枝に残して風去りぬ
彼岸花誰が植えしか赤に白

夕月夜 山本 春英

雲の橋渡りて月の昇りけり
夕月夜やがて照らせり並木道
語りつ、塾の帰りや秋の夜
耳鳴りに似て虫の音の途切れざる
逝き友と名月賞でしビル谷間

柿 北畑 芳草

つい二個目柿の甘さに誘われて
柿の赤店に並べし整然と
大和路の車窓に流る柿たわ、
子等の声なき運動場秋夕陽
あぜ道にほつりほつりと彼岸花

彼岸花 貝賀賀代子

秋蟬の声の弱まり陽の落ちて
赤々と墓所へと誘ふ彼岸花
仲秋に書仲間集ひ美術館
塾帰り少女のほつぺに秋夕陽
秋の夜の独りの夕餉何するぞ

爽やか 森本 智子

店たたむふとんの老舗ちちろ鳴く
昼の虫甘きコーヒーおやつ刻
秋の夜やぐんぐん流る白き雲
爽やかや声一本の狂言師
この子らに平和のバトン敬老日

秋の空 富原 満枝

六甲の山より秋風我が家にも
新米の香りも味わふ朝餉かな
秋空に吸はれし心洗われて
校庭の隅の売店青みかん
応援の声に走る子秋の空

秋の夜 磯辺 恵美

ピアノの音止みて遠近ちちろ鳴く
幼な子のハチマキ凜々し運動会
若くして逝く友の兄行く秋に
(ちちろ↓こおろぎ)



玄遠俳句

和年
令元 12月号

冬 構 早村 春鶴

一片の山茶花句帳の葉とす
雪国の雪に備へて冬構
里人は狐日和と言ふ時雨
延着のバス停すでに初時雨
雨音の乱れはじめて今朝立冬

寒 月 一谷 春窓

寒月や杉戸に猫の爪の跡
母なれば娘の愚痴聞く置炬燵
雪吊りの小さき庭先猫遊ぶ
したたかに独り暮らしの冬籠
終バスの過ぎれば消さん冬灯

夜 寒 山本 春英

青々と街を染めたる秋の空
居眠りに毛布をそつと夜寒かな
秋風や吾を運びし夢の国
秋の雲乗りて会ひたき逝き友と
子供等の去りし公園秋暮る、

冬来たる 北畑 芳草

おごそかな即位の礼や秋深し
災害の多き令和に冬来たる
紅葉に埋もれし街や高野山
二度三度被災地にはや冬来たる
ホツとしてやすらぐお茶や夜寒かな

赤蜻蛉 貝賀賀代子

菊日和庭でランチの老女会
萩の寺そぞろ歩けば源氏の香
草野原恋で賑はふ赤蜻蛉
我が生家軒下一面柿のれん
野にありて七草咲くや淡き色

藤 袴 森本 智子

熟せども鳥もより来ぬ渋き柿
黒雲の隙間の青き秋台風
少女グレタの警告のしみる秋
うつろひて白きの満ちし藤袴
痩せ螭螂首だけ回して一日暮れ

秋の空 磯辺 恵美

秋空にとどろく威勢新神輿
教え子の筆慎重に秋試験
神渡自然の力慄然と

山茶花 富原 満枝

山茶花の心に深くしみる色
母許へ山茶花の咲き継ぐ小道
ぬくもりを恋ひ大根を煮含める
あれやこれ加へおでんを煮含めて
御即位の祝意にかかる秋の虹

